

蛭谷和紙継承へ準備着々

朝日町蛭谷地区で蛭谷和紙文化を復活させようと活動する地元住民らが16日、かつて地区内の家庭で使われていた道具を確認した。不足分を今後購入するなどして準備を進め、2017年4月以降に本格的な和紙作りを始める。

朝日・地元住民有志

【webunnに写真3枚】



道具の状態や数を確認する地元住民ら

道具の状態や数確認

蛭谷和紙は越中和紙の一つとして知られ、かつては蛭谷地区の産業として栄えた。過疎化や高齢化の影響で現在は地元で職人はいない。伝統文化の継承を目的に住民有志が、びるだん和紙伝承準備委員会(長崎喜一委員長)をつくった。9月から月1回集まり、原料の調達法や和紙の作り方をまとめた。

この日はメンバーら6人が蛭谷自治会館を訪れ、紙すきを使う道具の状態や数を確認した。紙のサイズに合わせて道具も大きささまさまを用意する必要があり、予備も含めて購入する。17年1月までに協議会を発足し、2月ごろに試験的に和紙作りを行うスケジュールも打ち合わせた。

町の地方創生加速化交付金事業「いつてみたい、住みたい朝日町ブランドづくりプロジェクト」として取り組んでおり、4月以降に研修として県内の和紙産地を見学する予定。原料となるコウゾやトロロアオイを安定的に確保するため休耕田を活用した栽培も計画する。長崎さんは「和紙文化の復活に向けた機運を高めたい」と話している。